

# 「中国に新たな路線闘争」

## 最近の中国情勢で講演する中嶋教授



さを指摘したものと注目される。



陳雲第一書記



鄧小平主任

中国問題の研究者として知られる中嶋嶺雄・東京外国語大学教授は二十八日、社団法人アジア調査会主催の特別講演会で「最近の中国情勢と中国関係」と題して講演、このところ目立ち出した鄧小平

指導者層での路線対立の深刻

同教授は「鄧主任の経済面での開放政策は赤信号が

き、混乱し始めている。危機的な財政赤字の中で貨幣を大量に発行したため、平均二〇

によりトップを選べば、彼が選ばれるのではないかと二人の微妙な力関係に触れた。しかし同教授は、今回の「路線対立」について「文化大革命のような激しい対立はならない」と強調。その理

に「計画経済を主とし、市場調節は従とすべきだ」と迫り、市場原理を取り入れる鄧主任との間に基本的な考え方の違いを見せた。

「計画経済を主とし、市場調節は従とすべきだ」と迫り、市場原理を取り入れる鄧主任との間に基本的な考え方の違いを見せた。

さらに香港情報では、一連の人事問題をめぐって鄧主任と陳雲第一書記が対立、妥協の

## 鄧小平主任と陳雲第一書記

# 開放政策VS計画経済

最後に懸案の日中貿易について同教授は「国民総生産(GNP)が一人二五〇(五万円)の中国でテレビを

死に赴いた)以後にある種のツケを負わせるであろう」と述べ、ポスト鄧の体制作りにならざるを得ない

買える人はやはり少ない。日中貿易はこれ以上伸びないだろう。中国が安定するにはGNPが一人二〇〇(四万円)にならねばならず、二

上には新人事はようやくまとまった、という。このほか同教授は、陳雲第一書記について「ソ連首脳には喜んで会うのに、日本の財界人らとは決して会おうとしない」というエピソードを紹介

した後「今後、中ソ関係はさらに良くなり、中ソ貿易が増えるだろう。日本では、三大障害(①中ソ、中蒙国境のソ連軍駐留②ソ連軍のアフガニスタン侵攻③カンボジア侵攻のベトナムに対する支持)があるので、好転しないという見方もあるが、これらは西側への「プレゼンツ」に過ぎず、関係ない」とのべた。